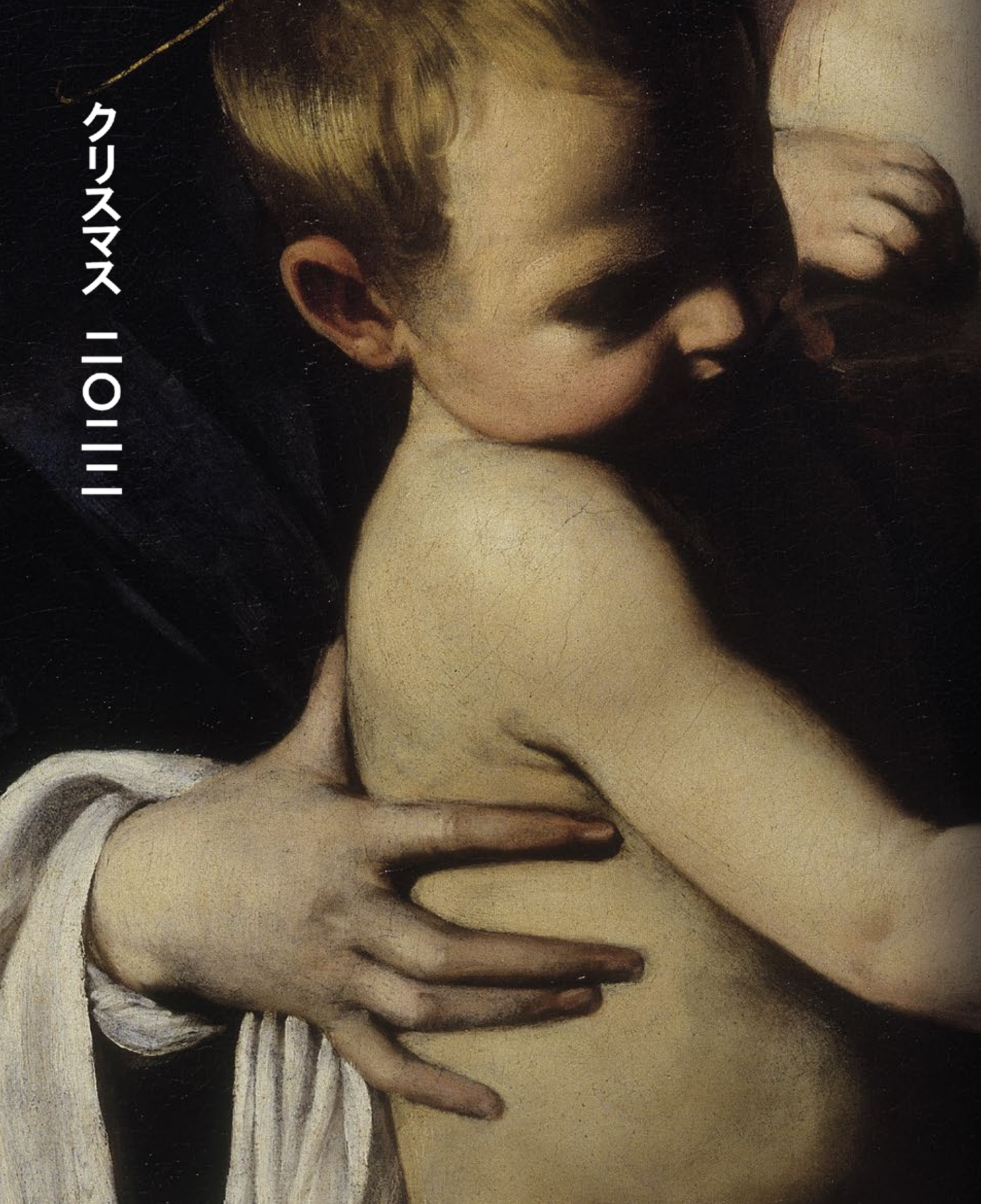

クリスマス 二〇二二

わたしにとってすべては、《晴れ渡った日》に出会う驚きのようにやってきた。それは高校1年生、15歳の時、一人の先生が聖ヨハネ福音書の最初のページを読んで《神のことば、すべてを成しているものが肉となった》、《したがって、美は肉となり、善は肉となり、正義は肉となり、愛、命、真理は肉となった。つまり、存在はプラトンのイデアの世界にではなく、肉となり、わたしたちのうちの一人となった》と説明してくれた時だった。これがすべてだ。若いわたしの人生は、思考を絶え間なく刺激する記憶や、日常の平凡さを再び評価するよう促すものとして、文字通りこのことにとらえれたからだ。その時から、わたしにとって瞬間は、もはや陳腐なものではなくなった。そのような《晴れ渡った日》が起こり、突然この上なく美しいものを見た時、君はそばにいる友人に話さずには、《ほら見て！》と叫ばずにはいられないだろう。実際そうなったのだ。

ルイジ・ジュッサーニ

わずか15歳の少年だった彼は、キリストの神秘の発見に心が燃えたのです。彼は、頭だけでなく心でキリストが現実のすべてを統一する中心であることを、キリストが人間のすべての問いに対する答えであり、人間の心に存在する幸福、善、愛、永遠に対するあらゆる願望の完遂であることを直観しました。このキリストとの最初の出会いの驚きと魅力は、彼の心を捉えて離しませんでした。彼の葬儀の際、当時のラツィンガー枢機卿は《ドン・ジュッサーニは、その人生と心のまなざしを常にキリストに向け続けていました。彼はこのようにして、キリスト教が知的体系や教義の一連、道徳主義ではなく、出会いであり、愛の物語であり、出来事であることを理解したのです》と述べています。ここに、彼のカリスマの根源があります。ドン・ジュッサーニは、あの根本的な体験の後、自分の中に持っていたもの、つまり人間に対する情熱と人間の完遂としてのキリストに対する情熱を他の人々に伝えたので、人々の心を惹きつけ、納得させ、回心させたのです。

教皇フランシスコ

コムニオーネ・エ・リベラツィオーネ

カラヴァッジョ、*巡礼者の聖母*（部分）。サンタゴスティーノ教会、ローマ。© Foto Scala, Firenze.